

うに両種の間にはあいまいである。Chen は key characters として葉形と無性芽の有無を用いている。私はまだどちらのタイプ標本も見っていないが、各地の標本を検討してみたところ、葉細胞にパピラのあるものでは、葉細胞の形、大きさはどれもほぼ一定であり、中肋、茎の構造にも差は認められないし、中肋の腹側には明瞭なパピラが密にあり、背側には粗にパピラがある。又無性芽がなくても葉は広舌形のものもあれば、無性芽があっても葉が狭いものもあり、両種を区別することはむずかしく、疑問は残るが、ここでは Cardot (1906) のあげた葉形に関する特徴に従って別種としておく。

Hyophila stenophylla Cardot, Bull. Herb. Boiss. 8: 332 (1908).

H. angustifolia Cardot, Beih. Bot. Centralbl. 19: II. 101 (1906).

Barbula planifolia Brotherus et Yasuda, Oefv. Finsk. Vet. Soc. Foerh. 62A (9): 10 (1921), syn. nov.

Specimens examined: Japan. Gunma Pref., Tonan mura, leg. Tsunoda, s. n. ex Herb. Sasaoka in TNS (type of *Barbula planifolia* Broth. et Yas.); Mie Pref., Ise, Mt. Asama, leg. Magohuku no. 96; Yamaguchi Pref., Akiyoshi, leg. Anno no. 3; Miyazaki Pref., Nichinan, Inohae, leg. Saito no. 3580; Kumamoto Pref., Kawamura, leg. Maebara, Musci Japonici Exs. no. 527 in TNS.

引用文献

Brotherus, V. F. 1921. Oefv. Finsk. Vet. Soc. Foerh. 62A(9): 10-11. Cardot, J. 1906. Beih. Bot. Centralbl. 19: II. 101-102. Chen, P. C. 1941. Hedwigia 80: 179, 184, 190-191, 233-234, 242-244. Fleischer, M. 1904. Musci Fl. Buitenzorg 1: 356-357. Toyama, R. 1937. Act. Phytotax. Geobot. 6: 102-105.

(東京教育大学理学部植物学教室)

□ Kazuhiro Itoh: **Report of Botanical Survey in West Nepal on 1963.** 88 頁, 90 図, 海外技術協力事業団医療協力部 (新宿区本村町)

1963 年から 65 年にかけて、コロンボプラン専門家としてネパールに滞在した伊藤和洋氏の報告書の一部である。1-16 頁には 1963 年 7 月から 10 月にかけて行なわれた西部ネパール植物調査の概要と、採集品 150 種のリストがある。17 頁から 9 頁にかけて、同氏が採集同定された薬用植物約 450 種の土名—学名対照表がある。また 40 頁以降にはこれら薬用植物の内 90 種が、線画、写真、部分図などで示されており、同氏の手になるものもかなり入っている。第一部は整理が不十分なので利用し難いうらみがあるが、第二部の薬用植物名の索引は今後ネパールの有用植物を調べる上に便利であろう。目につきにくい出版物なので紹介する次第である。なお頒布価格は不明なので、海外技術協力事業団に問い合わせられたい。

(金井弘夫)